様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2010
課題番号：19520210
研究課題名（和文）２０世紀ドイツ語圏の演劇と音楽における母型の概念

研究課題名（英文）On the Concept of Matrix in 20th Century German Theatre and Music

研究代表者　藤井　たぎる
（FUJII TAGIRU）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：00165333

研究代表者の専門分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：独文学

１．研究計画の概要

当研究の目的は、資本主義経済下の大量生産システムにおいて、文学・芸術の創造と受容もまた、生産と需要（消費）のサイクルに取り込まれるほかない状況のなかで、いわば歴史的時間の外に投げ出され、自らのよってたつ起源を失わざるをえなくなった 20 世紀の作家や芸術家たちが、意識的にせよ無意識的にせよ、主題化することになる母型の概念をキーワードとして、20 世紀ドイツ語圏の演劇と音楽が取り組んできた諸問題を明るみにする点にある。そのために、下部構造（社会的・経済的諸条件）と上部構造（文学・芸術などの創作活動）とのあいだのこれまで指摘されることのなかった具体的な関連をあわせて解明したいと考えている。

たとえば音楽の場合、産業革命以降の資本主義の発展とともに調的和声音楽は成熟していったが、芸術音楽の生産（作曲・演奏）および消費（聴取）は、そうした資本主義社会のメカニズムと相関関係にあると考えられる。以上の観点からつぎのことを明らかにする。

（１）産業革命以降の資本主義の発展なしに、和声音楽の爛熟はあり得なかったこと、またポスト産業資本主義の台頭と作曲家シェーンベルクの“12 音システム”に端を発する和声音楽システムの崩壊とは相互にリンクしていること。

（２）20 世紀初頭以降の調的和声の崩壊とそれによってもたらされたオペラの“死”を価値形態および恋愛形態との関係から捉えることにより、20 世紀の音楽劇に見られる／聴かれる“症候”が、価値形態および恋愛形態の母型（マトリクス）によって必然的にもたらされたものであること。

２．研究の進捗状況

（１）世紀転換期のウィーンにおいて、マーラー（音楽）＝グスタフ・クリムト（絵画）＝オットー・ヴァーグナー（建築）の三つ組みにかろうじてまだ残滓として認められる装飾性は、つぎの世代のシェーンベルク（音楽）＝エゴン・シーレ（絵画）＝アドルフ・ロース（建築）の三つ組みでは、完全に放棄される。18世紀以来の調的和声音楽を支えてきた協和音と不協和音の差異のシステムは、あくまでそのシステムの内部においてのみ意味を持つにすぎない。そのシステムの外部において、あるいはシステム自体が解体してしまえば、両者の差異はなくなり、協和音や不協和音もまたその意味や価値を失うほかない。そうした認識に基づき、シェーンベルクがもっぱら音と他の音との差異にのみ基づいたシステムを再構築することによって、新たな音楽のマトリックス＝母体を提示してゆくことになる経緯を解明した。

（２）調的和声のシステムとマルクスの価値形態の相同性を具体的に解明した。調的和声における不協和音は、シェーンベルクにとっていわば資本主義社会における恐慌のようなものとしてある。したがって、シェーンベルクが調的和声システムにおけるエラーを修正すべく、あらたな12音によるシステムを構築することになる経緯を解明した。

（３）モンテヴェルディ、グルック、ハイドンたちによるオルフェオ神話を題材にしたオペラ、およびモーツァルトのダ・ポンテ三部作（ダ・ポンテ台本による三つのオペラ『フィガロの結婚』、『ドン・ジョヴァンニ』、

『コシ・ファン・トゥッテ』）における恋愛形態の推移を、マルクスが価値形態論において提示した交換形態の“進化”の過程と比較することによって、恋愛もまた交換形態のひとつとして“資本主義化”されざるを得なくなる経緯を解明した。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

資本主義とオペラの関係、あるいは資本主義と調的和声・12 音技法の関係を解明する過程で、マルクスの価値形態を数式化し、その値がラカンの対象 a の値と同じであることを発見した。そのため、仮説の論証を精緻に行うことができるようになったばかりでなく、この発見によって資本主義が芸術的な営為と所産の母型（マトリクス）であることを明示的に示すことが可能になった。

４．今後の研究の推進方策

調性の崩壊（“無調”、12 音技法）と恋愛形態の破綻（ヒステリー）とは密接に関係しているという仮説のもと、調的和声の発展からその崩壊への、そして／あるいは恋愛劇場としてのオペラの誕生からその“死”へと至る過程を縦軸とし、リヒャルト・シュトラウス、アルノルト・シェーンベルク、アルバン・ベルク、アントン・ヴェーベルンらによる調的和声の解体、フロイトとラカンの精神分析、ホフマンスタールによる悲劇の“読み直し”を横軸として、20 世紀前半におけるオペラの“死”とヒステリーとの相関性を明らかにする。そのために、以下の事例研究を計画している。

（１）恋愛という名の対象 a：ベルク『ルル』の場合

（２）ヒステリーと無調：リヒャルト・シュトラウス『エレクトラ』の場合

（３）恋愛形態における嘆願と恩寵：グルック『オルフェオとエウリディーチェ』の場合

５．代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 藤井たぎる、モーツァルトのダ・ポンテ三部作における恋愛技法、国際シンポジウム『戯れのテクノロジー』論文集、90-99、2010、査読無

② 藤井たぎる、“剥き出しの生”、“剥き出しの音”、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化研究叢書』、8、93-105、2009、査読無

③ 藤井たぎる、不協和音の恐怖、国際シンポジウム『恐怖からの思考：現代世界を解明する』論文集、141-155、2009、査読無

④ 藤井たぎる、シェーンベルクのマトリックス、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』、XXIV/2、215-225、2008、査読無

〔学会発表〕（計４件）

① 藤井たぎる、モーツァルトの『コシ・ファン・トゥッテ』における恋愛技法、国際シンポジウム「戯れのテクノロジー」：音楽セッション「音楽の戯れ」、2009 年 11 月 22 日、名古屋大学

② 藤井たぎる、マトリックスに抗って、大学間連携事業：シンポジウムとパフォーマンス「From the Sound, to the Sound：現代日本の音を求めて」（名古屋大学大学院国際言語文化研究科先端文化論講座・愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース共催）、2008 年 11 月 28 日、名古屋大学